

# 日本民家園だより

Vol.83

のぞかないでください…



…けっして中を

2015年 7月1日(水)～11月29日(日)

企画展示 「むか～し どうぐ むかしの道具たち

むかしばなし つた  
—昔話が伝えるくらし—

## はじめに

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました…

こんな昔話を、だれもが一度は聞いたことがあるのではないだろうか。夜、いろりの火を囲みながら、おじいさんやおばあさんが語る話を、子どもたちはわくわくどきどきしながら聞いていました。そんな昔話は、時に楽しく、時におそろしく、また時には悲しかったりふしぎだったり、さまざまなものがあります。そしてその背景には、今とは違うくらしの様子や、ものごとの考え方などを読みとることができます。

今回の展示では、民家園に移築された建物のふるさとに伝わる昔話を中心に、登場する道具などを通して、その背景をのぞいてみたいと思います。

ここではその中でも皆さんがよくご存知の昔話と、川崎市に伝わる昔話をご紹介します。

## 鶴の恩返し (山形県南陽市)

むかし、漆山の里に金蔵という男がいました。ある日、金蔵は子どもたちにいじめられていた鶴を助けました。その夜、美しい女が家をたずねて来ました。その女は足をけがしていたので、金蔵は手当をして、家に泊めてあげました。

次の日、女は助けてもらったお礼に機織りをすると言いました。そして、「七日の間はけっして中をのぞかないでください」と言っ  
て部屋にこもって機織りをはじめました。しばらくはじつと待っていた金蔵でしたが、ご飯も食わずに機織りをする女が心配になり、部屋の戸を開けてしまいました。するとそこには一羽の鶴がいて、自分の羽を抜いては織り、抜いては織りしていました。金蔵に気づいた鶴は、「すがたを見られたからには、ここにはもういられません」とさびしそうに言いました。鶴が織っていたのは「おまんだら」というもので、それをのこして鶴は消えてしまいました。女は、金蔵が助けた鶴だったのです。

その後、金蔵は金蔵寺をたてました。寺には鶴の織った珍しい「おまんだら」がおさめ  
てあったので、「鶴布山珍蔵寺」とよばれるようになったそうです。

(出典…山路愛子『むがし昔あつたけどー夕鶴の里で語った百話』東神文化企画 二〇一)

\*\*\*\*\*

この昔話は、題名の通りよく知られていますが、お寺の縁起に関係しているのは珍しいとされます。民家園には、山形県鶴岡市から移築された旧菅原家がありますが、菅原家でも機織りが女性の仕事として行われていました。機織り機は、代表的なものに地機と高機があります。大陸から伝来した当初、地機は麻を織るためのものとして、高機は絹を織るためのものとして使われました。表紙のイラストの鶴が使っているのは地機

高機





## 鼻取地藏 (高津区上作延)

むかし、上作延に働きものの親子がいました。親子の田んぼからはおいしい米がたくさんとれたので、村の役人がほしがりましたが、だいたい田んぼなので親子は売りませんでした。そこで役人は、「六月一日までに田植えを終えなければ、田んぼを取りあげる」と五月の終わりに言ってきました。親子は困ってしまいました。

次の朝、役人が馬を貸してくれましたが、あばれ馬で代かきができず、鼻取をしていた子どもは泣きだしそうになりました。そこへ、かわいらしい小僧さんが来て鼻取を代わってくれました。すると馬はせっせと働き、親子は田植えをすませることができました。小僧さんは、親子がよび止めるのも聞かずにどこかへ行っていました。



延命寺の鼻取地藏

次の朝、延命寺のお坊さんがお地藏さまの足に泥がついているのに気づきました。小僧さんの正体は、お地藏さまだったのです。

それからというもの、村人はこのお地藏さまを「鼻取地藏」と呼ぶようになりました。馬の産地の岩手や青森あたりからも、農民や馬をあつかう人たちがおまいりに来るようになったそうです。

(出典…萩坂昇ほか『かわさきのむかし話』むさしの児童文化の会 一九七〇)

\*\*\*\*\*  
代かきは、田んぼに苗を植える前の準備のひとつです。一度土を起こした後、田んぼに水を入れて、マンガを使ってかたい土をくだいてやわらかくします。



マンガ  
まぐわ  
馬鍬ともいいます。



代かき風景  
ふつけい  
昭和28年(1953)、登戸にて。  
のぼりと  
しやうわ  
(川崎市市民ミュージアム蔵)

この時、マンガを引いている馬や牛の鼻に長いさおをつけて、代かきする場所に誘導する役目を「鼻取」といいます。鼻取は重労働でしたが、子どもの仕事でした。

この昔話では、鼻取がうまくできず困っているところへ、小僧さんの姿を借りたお地藏さまが助けにきてくれます。お地藏さまは、日常においてのいろいろな悩みから救ってくれる仏さまとして、昔から大切にされてきました。鼻取を代わってくれるだけでなく、田植えを手伝ってくれたお地藏さまの話もあります。

\*\*\*\*\*  
おわりに

ここでは二つの昔話をご紹介しました。もちろんこのほかに、日本各地にはさまざまな昔話が伝えられています。そしてそれぞれの中に、昔のくらしについて知るための手がかりがたくさんこめられています。ぜひ、身近にある昔話を探してみてください。

## 今回の展示で紹介する資料・昔話



かさ  
笠（笠地藏）

雨・雪・日ざしをよけるために使います。  
「笠地藏」では、おじいさんがお地藏さまにかぶせてあげます。



こんじきひめそう  
金色姫像（養蚕のはじまり）  
日本に養蚕を伝えたときのお姫さまの像です。



ちようちん  
提灯とろうそく（きつねに化かされない話）  
提灯の中に入ろうそくを入れて使います。  
くらよみちて  
暗い夜道を照らす道具です。



ポテ（ダンダラボウシ）  
エサとなる魚を入れておく、大きなピク  
です。



かま  
釜（食わず女房）  
かまどで米を炊く時などに使います。

・たぬきの糸車

・笠地藏

・鶴の恩返し

・鼻取地藏

・養蚕のはじまり

・ダンダラボウシ

・食わず女房

・きつねに化かされない話

・七曲がりのカッパ

・ザシキワラシ

## 日本民家園だより vol.83 発行：平成27年7月1日

川崎市立日本民家園 URL <http://www.nihonminkaen.jp/>

〒214-0032 川崎市多摩区枳形7-1-1 TEL 044(922)2181 FAX 044(934)8652

交通 小田急線「向ヶ丘遊園」駅下車南口より徒歩13分

開園時間 [3～10月] 9時30分～17時 [11～2月] 9時30分～16時30分（入園は閉園30分前まで）

休園日 毎週月曜（祝日の場合は開園）、祝日の翌日（土・日曜の場合は開園）、12月29日～1月3日

入園料 一般500円、高校・大学生300円、65歳以上300円（川崎市在住の方無料）、中学生以下無料